

武蔵野市学習者用コンピュータ通信

第24号

発行

武蔵野市教育委員会指導課

令和5年1月

市ホームページにも、これまでのバックナンバーを含め掲載しております。

「学習者用コンピュータ通信」を検索していただくか、QRコードでアクセスしてください。



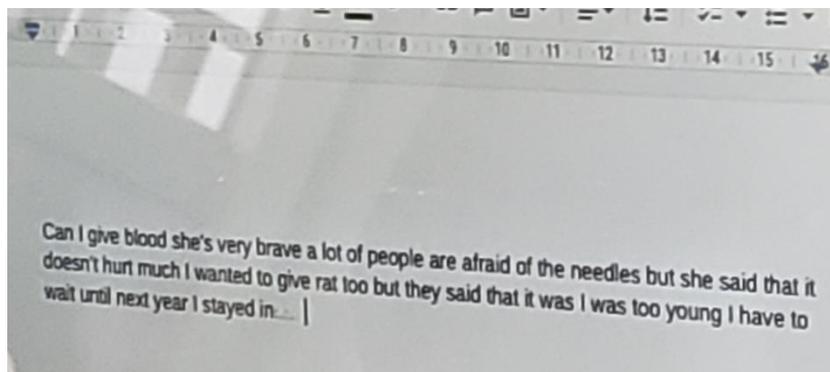
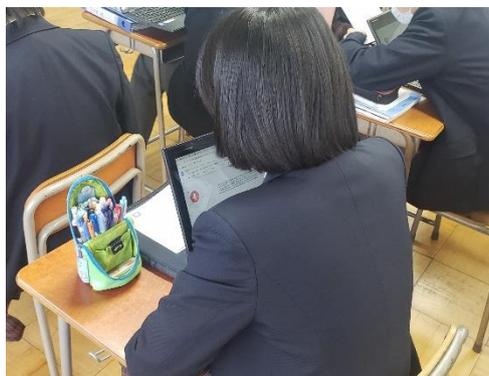
検索



英語で「話す」ことを「目」で確認することができました

市内の中学校3年生の学級で、Google ドキュメントの音声文字入力機能を活用した英語のスピーキングの授業の様子をご紹介します。

学習者用コンピュータが配付されるまでは、自分の発音がどのように聞こえているか、すぐに確認することができませんでした。しかし現在は、Google ドキュメントの音声入力機能を活用することで、瞬時に自分の発音を文字で確認することができるようになりました。これにより、今まで気づきにくかった自分の発音の癖や特性を発見することができるようになりました。記録された文章を見直すと、発音したとおりに文字で入力されることもあれば、思ったとおりに入力されないこともあり、生徒は驚いていました。



【マイクで発音を記録している様子】

【Google ドキュメントに音声入力されたスピーキングの内容】

活動を終えた生徒からは「自分がちゃんと発音できているか、確かめられるからよかった。」「入力された文字を見直したら、「L」と「R」の発音の仕方に注意しようと思った。」「リンキング(発音をつなげる)を意識しすぎてしまった。」等、手応えを実感した発言や、次回への課題を意識した発言が聞こえてきました。担当の先生からも「イントネーションを注意しようとする生徒が増えた。」「自分の発音を文字として認識することで、次へのフィードバックに役立っている。」と音声入力機能の効果を実感している様子が伺えました。

この他にも、学習者用コンピュータを活用し、活動の課程を記録として残しておくことで、振り返りに活用している事例もあります。例えば、カメラ機能を活用して話し合い活動の様子を記録したり、美術の作品の制作過程を記録したりして、振り返りの資料として活用している授業がありました。活動の様子を記録することが容易になり、学習の振り返りに役立っています。 (裏面あり)

「人が作ったものを大切に活用しよう」とする態度が養われていました

市内の小学校3年生の学級で行われた、デジタル・シティズンシップ教育について具体的な実践をご紹介します。

「人が作ったものを大切に、ことわざや故事成語をまとめよう」をテーマに国語科の授業が行われました。児童は、1学期に調べたことを報告する際、本や資料に書いてある言葉と、自分の言葉、考えを区別する必要があることを学びました。しかし、そこで学んだことを他の教科や場面で活用することは難しいものです。今回はそのことに着目し、改めて正しい引用の方法を確認するとともに、なぜ引用したときに出典を明らかにする必要があるのか、について皆で考える授業が展開されました。

授業では、児童が前の時間に作成したスライドが、制作者の名前を変えて学級に提示されました。引用された子どもは、自分の作成したスライドが他の人の名前に変えられていることに気付きました。「勝手にまねされるのは嫌だ。」「私はそんなに気にならないな。」と様々な受け止め方が見られました。それをきっかけに、引用した人、引用された人の両方の立場になって気持ちを考えました。



【児童同士で話し合っている様子】

次第に当事者意識が高まっていき、引用したことを明らかにすることをただ「ルールだから。」「決められているから。」として守るのではなく、引用された側の人の気持ちを大切にするために、出典を明記する必要性を実感していました。

担任の先生は「授業の振り返りを書くことで、出典の必要性や作った人の気持ちを大切にしたいと考えることができた。今回の授業で終わらず、今後も継続して指導していきたい。」と話していました。

学年が上がるにつれて、調べた資料を基に自分の考えや意見をまとめる機会が増えます。どのような資料から引用したのか、出典は何かを明記する習慣が身に付くことは大切です。様々な学習活動を通じて児童は学び続けていきます。